



アナタに 恋届け隊！



＋歌＋

恋届け隊とは…小天使が一人前の天使になるために作られた、
天使育成プロジェクトチームのこと。

人間界に行き、さまざまな愛に飢えてる人たちに
誰かを愛する幸せを届けること…それがこの恋届け隊の仕事。

旗が風で揺れる、童話の世界でよくみるようなお城が見えた
昼間の天空に祝いの花火が鳴り響く。
この場所は人間の知らない雲の上にある天界というもう一つの世界。
ここには天使、その子孫…小天使が暮らしている。
この天界で生まれた小天使がエンジェルスクールと呼ばれている
いわゆる学校を卒業して、一人前の天使になっていくのだ。

今日はそう、その小天使達が初めて人間界に行き
実際に人間に恋する気持ちを届ける訓練の出発の日だった。
そしてこれは、学園が立ち上げた天使育成プロジェクトチーム、
その名は「恋届け隊」、を卒業するための最後の自習試験でもある。

出発を祝う儀式の終了直前、話をしていた校長が不機嫌そうに旅立つ生徒の中に
人際目立つ生徒ひとりのをにらみながら、こう言った。
「今日は記念すべき日だろう…旅立ちの日だ、ドキドキやわくわくで
期待に胸を膨らませてもおかしくないはずだ。
しかし…眠気を持つものがおるとはなぁ？そうだろ？…なこ！」

なこの友達、ふわふわした髪がよく似合う女の子、アリスが
なこの体を揺らして起こす。
「なこちゃん！起きて！！」
うっすらと目を開け、アリスの顔を見て安心するなこ。
「あ…まりあちゃん！もう終わったの？」
「いや…そうじゃじゃなくて、まえまえ！！」
困った様子のまりあにうろたえることなく、なこは校長のほうを向いてこう言った。

「校長ちゃんの話し長いんだもん。早くしてえー」
「こらっなこ！お前って奴はこんな日まで！！…というか
校長ちゃんはやめろって言っただろ！！」
校長は、なこのペースにすっかりはまってしまい、剣幕にすごく怒った。

しかしここは教室の通常授業ではないため、それを思い出した校長は咳払いをして
「まあ…よい。いいから、聞け」っとなこに、はき捨てた。
そして校長は星のついたステッキを振り、小天使達に魔法をかけた。
「これが、人間界での学校の制服だ、人間にはあらかじめ魔法がかけてあるから
入学の手続きは出来ている。」

「おお、まりあちゃん可愛いね」
「なこちゃんもだよ？」
「同じエリアに選ばれて本当によかったよ～」
「わたしも、いろんな意味でなこちゃんと一緒にいたかったし…本当によかった」
と二人が会話をしていると
「では、そろそろ最終項目にはいろうか。」
と校長が言い、1000枚以上のカードがたくさん並んだ机が運ばれてきた。

「すごい数だね、あのカード」
「なこちゃん、あれは私たちがこれから恋を届ける試験に
協力してもらう人間の数の枚数だよ」
「ああ、そかそか！」っとさっき他の先生に教えてもらったのにも関わらず
忘れていたなこは、まりあの説明でうなづいた。

「なこ、お前には少し大変かもしれんぞ？」っと校長は
なこの方をいたずらっぽい目で
「最近はちと、恋愛に対して冷血な人間が増えているからな。」と言った。
「冷血…？恋をしないってこと？」となこはきょとんとした顔で返すが、
「そんな人間に、お前がどうやって恋を届けられるか楽しみじゃわい」
と笑って校長は答えた。
「では、校長先生」となことどこかよく似た面影の教師が言うと、
校長は生徒達をまっしぐらに見て、
「うむ…では諸君、期間は一年じゃ、この一年で君たちが
これから選ぶカードのパートナーに最高の恋を届けるのだ。
さあ儀式もこれでお開きとする、カードを選んだものから人間界に飛び立つのじゃ！」
そう言うと花火は大きく打ち上げられ、儀式がおわりを告げた。

ここの空は天界よりもくもの数が多い。なこまりあは旅立った後すぐ、
ビルのような建物の屋上で話をしていた。
「期間は一年かぁ…ねえ、まりあちゃん？」
「うん」
「こんな一年だなんて…わたし」とうつむきながら、なこが何かを言うとした時

それを察したのか、まりあは心配そうな顔をした。

「…そうだよ、いくらなこちゃんでも…不安でドキドキだよ…」

「うん…ドキドキだよ」

まりあは励まそうと、隣にいたなこに近づいた瞬間

なこは顔をあげた。

「人間界！遊び切れるか！！」

その上げた顔を見た瞬間、まりあは口をぽかんと開けた、

なこは不安がるそぶりを全く見せず、まんべんの笑顔でこう言ったから。

まりあは、はっと正気に戻ると

「あっあそぶって…一年しかないんだよ…！？」

「大丈夫だよ！！」

心配するまりあとは反対にのほほんとなこは答えると、真っ直ぐ前を見た。

「どんなに冷血な人間でも、必ず愛はある…私信じてるもん。」

「え…」

「だからさ…」

まりあはのほほんとしていても真剣な言葉のなこに見た。

「遊びながら、がんばろ？」

「なこちゃん…」

まりあはなこの言葉に心を打たれて、ジーンときていた。

こんなに大人になって…。

「ごめんね、なこちゃん…わたし誤解してた。違うのね？本当のなこちゃんは…」

とまりあが言いかけた瞬間、

「じゃあ！さき人間界のパートナーの家に、行ってくるねー」

っと翼を広げて、ワーンと飛んでいってしまった。

「え！？なこちゃんー！？」

取り残されたまりあは思った。

「わたしが思っていたよりもなこちゃんは、子供だったのね…」

そして、なこの後を追っていった。

「着いたら、ルルポンも出してあげなきゃね」

飛びながら、持っていた鞆に入っていた一枚のカードを出して見ながら

どんな人かな…私が初めて、恋を届ける人…。

となこは思いながら、チャイムが鳴り響く学校の向こうにあるパートナーの家へと向かっていった。

第一話 小天使なこ 恋届けます！

授業終了のチャイムが鳴った。俺はいつものように
親友の村上 渉（わたる）のところまで駆け寄った。
しかし様子がおかしい、あの顔はどうやら用事が入ったということを感じさせた。

「どした？ 今日無理？」
「ああ。わるいな・・・部活の先輩に呼ばれちゃってさ」
「そか、じゃあな。」
「おう！」

俺の名前は水野 久也（ひさや）
学校は嫌いじゃないが、下校時間が俺が一番嫌いだ。

いつもは渡が一緒だから、特に気にしないはずだが・・・
「水野くん・・・あの・・・ちょっといいかな？」
こう、たまにいない日に限って声をかけられる。
声をかけてきたのは他校の女子、いわゆる一部の男子の仲では、
「学校一のモテる女子」と呼ばれるんじゃないかと思うぐらいの
髪をふたつに結んだ、優しくふわふわした印象の女の子だった。

俺はこの子のことは、一応知っていた。一応と付け足したのは、
同じクラスの女子の友達らしく、紹介で少し会話した顔なじみではあったから。
俺は特に何も感じない。知り合いではあるが、友達という存在ほどではないし。

むしろこの後、この子が何を言おうとしてるかが見えていた、
たいてい話しかけてきて、こういう風うつむく時、決まってこのパターンだから。

「わたし・・・水野くんの事が好きです」
「・・・そう」
「わたしの事知ってるよね？・・・付き合ってほしいの！」
「俺さあ・・・」

といった瞬間、女子は不思議と目を輝かせたが・・・
俺が言った言葉によってその表情はどんどん曇っていった。
別に悪気ねえし・・・。

「恋とか・・・興味ないから。」

「え・・・」

「そういうの無理、・・・じゃあ。」

女子の体が震えてるのは伝わってきてはいた。

しかし俺の心は何とも感じない。

残った感情といえば・・・興味の無いものに無理やり付き合わされて
気だるく思う気持ちだった。

「何よ・・・気のなくせに。」

「ん？」

俺は重い体を振り向かせたが、後で後悔した。

「優しくしないでよ！ばかぁ！！」

女はすぐ優しくするとこうだ・・・ちょっと現実が理想と違うと
すぐ相手のことを悪く言う。

俺が・・・バカ・・・？

勝手に好きになったのは向こうじゃないか。

女子は泣きながら、そのまま走り去った。しかし一人の下校中のため、
周りからの目は半端じゃなかった。

「水野、また振ってるよ・・・」

「ひどっ・・・これで何回目？」

「最低だよー・・・」

世間は何も知らないくせして、言いたいことばかり言う。

何で俺が言われなきゃいけないんだ？

何で俺がバカ扱いされなきゃ・・・意味わかんねえ。

俺は過去の出来事以来、恋愛という感情が嫌いだ。

俺に恋愛なんて、必要ない・・・恋なんて、するだけ無駄だしめんどくさい。

そう思っていた。

ごく普通のマンションに住んでいる、二階の一番奥だ。

ポストを見ると手書きの手紙が入っていた。・・・またこれかよ。

だいたい中身はわかっていたが、どうしようもなく鞆に押し込んで入れた。

「たくっ今日は疲れた…ん？」

二階の一番奥まで歩いた。しかしその扉の前には…なんと見たこともない少女が座り込んで寝ていた。

「誰…？」

部屋間違えた？…いや、確かに二階の一番端だし間違えようがない。てか、何で寝てる？

よく見ればその少女は、ウチの高校の制服に女子にしては大きすぎるぐらいのサングラスをかけていた。

とりあえず…めんどくせえけど、こいつ起こさないと部屋に入れないし。俺はしょうがなく少女の体をゆすって起こした。

「おい、起きろって！」

その瞬間少女がかけていたサングラスが、揺らした拍子に落ちた。

ふわっ

その時突然、少女の背中から白い翼が現われた。
まばゆく暖かい光とともに、たくさんの羽が舞い降りた。
俺はこの時…どうしてこう言ったのか、今でもわからない…。
少女を見た時に心の中で何かが動いた。

ドキッ

「天使…？」

そう呟いたとたん…光は消え、翼はなくなっていた。
ハッと俺は我に返った。
無意識に自分の口から出た言葉に、びっくりした。何変な女に天使って…。
しかも「ドキって」何だ！？…意味わかんねえ。

ていうか、こいつは誰だ？さっきの羽は？…幻覚？

「誰だよ…コイツ…」

「お前こそ、なこに何してるミー？」

「ん？…俺はぁ…え？」

「ミ？」

背後から突然声が聞こえたが、その時はてっきり近所の人だと思ったから
すんなり返して振り向いた。しかしその後ろにいたのは…近所の人でもない
しかも人間でもない、羽の生えたウサギのような変な生き物だった。

「うわあああ！！…なっなんだお前ー！？妖怪？おばけ！？」
ビックリしすぎたせいか、勢いよく壁に腰をぶつけてしまった。
「おばけじゃないミ！！ルルポンだミー！！」

ルルポンって…意味わかんねえよ！！

変な女はいるし…変な生き物いるし。
ん？もしや、今思ったけど…この生き物もこの女と関係してるんじゃ。
飛んでる生き物だなんて普通じゃなし。同じ”羽”という共通点から思った。

「ああー、わかったよ」
「ミ？」
イライラが募る。さっきの女といい、今この目の前にある女とこの生き物といい
今日は何か変だ。ドイツもコイツも…。
俺はこの謎の生き物の顔を、両手でガシッとつかんだ。
そして…思いっきり振り回した。

「おまえら、迷子なんだな？？ミミポンかペケポンか知らないが、ここは俺の家なんだよ？
だからさぁー困るから警察につれてってやるよ？それでいいだろお？？」
「離してミーー！！ルルポンだミー！！」
俺はよく言われるが性格が悪いらしい、だからといって直す気はない。
意味不明の奴を助けられるほど、優しくするなんて気持ちは全く持つ気さえないから。

このまま警察に連れて行けば、俺はキレイさっぱりスッキリできる。
少女が寝ているうちにさっさとこの生き物を連れて行けば…その時だった。
「う…ううん」
「ミ？」
「…え？」

少女が目を覚ましてしまった。さっき揺すって起こしても、ダメだったのに…。
何で、こんな時にだけ起きるんだよっ！？

「ふああ…よく寝たあ…あ！！」

目をキラキラと輝かせて、少女はこっちをみる。

ゲッ…目が合ってしまいそうで、俺はすぐそらそうとしたが遅かった。

少女は目が合うと笑顔で言った。

「よかったあ～ちゃんとパートナーに会えた～！家にも着けたし～！」

何言ってんだ…コイツ。

「あっそうだ！えっとねえ…」

ん？

少女は、ゴソゴソと近くに置いてあるをバックのポケットをあさる。

「あった…これ！」

「え…」

俺の姿が映ったカードを差し出して、少女は言った。

「あなたが水野久也ですね？」

「は？…何であんた、俺の名前…」

見ず知らずの者が自分のことを知ってるというのは、聞いたときは変に寒気がした。

「わたしは、恋届け隊の小天使…なこ！あなたのパートナーに選ばれたの。」

「小天使？恋届け隊？？」

コイツ何を言ってるんだ？パートナーって何のことだ？

「恋届け隊とは、つまり…」

ゴクンッと無意識に息を呑んだ。

「あなたにステキな恋を届け、そしてそれを叶え幸せにすること！、

100%純愛宅配サービスだよ！もちろんお金などはもらわないから平気だよ～！！」

「純愛宅配サービスねえ…」

「うん！それでね」

ピキッと何かが切れた音がした。

この少女、なこの言葉を全て聞き終わる前に、俺は頭に血が上る感覚が何となくわかった。

「って…意味わかんねえよっ！！」

空にこだまするぐらいの声で、俺は怒りを空にぶつけるように怒鳴った。

「くそっ…」

「へ？何で？…だから、わたしは小天使のなこで…」

「んなの、聞いてねえ！」

その言葉と同時に俺は彼女に近づき、なこが手に持っていたカードを力強く奪い取った。

「もらってほしいなら、もらってやる…だから」

なこはその時、目を丸くしてただ俺の顔を見つめていた。

そして俺がこういった瞬間…

「お前はさっさとここから、消えろ！」

なこの顔は凍りついたように、固まった。

その言葉を言ってる時は、まさか他にこのやり取りを見てた人がいたなんて

なこの様子に夢中だった俺は、気が付かなかった。

なこは下を向きながら、困った顔をした。

「そんな…困るよ。わたし…今日からここに住むんだもの」

「はぁ？ここは俺の家だ！！お前の家じゃねえ、

お前の住めるエリアなんて、どこにもないんだよ！！」

なくかもしれないと思ったが、俺はわざと強めに言った。機嫌が優れないのもあったから。

しかしなこは、そんな俺に言い返した。

「じゃあ…作ってよ…」

「はぁ？」

「わたしの住むエリアッ…作ってよ…？」

なこは瞳をうるうるさせながら、すがりつくように俺を見た。

普通の同い年ぐらいの女子こんな感じで見られても、当然びくともしない俺の心だが

何故か、なこの前での俺はおかしかった。めずらしくドキッと動揺していたから。

「だっダメなものはダメだー！！」

「えーん…ルルポン～！！」

「泣いても無駄だ！！」

ダメだ…ハァハァ…このままじゃコイツのペースに巻き込まれてしまう。

とにかく何とかしなければ…

「…いい」

「ああ？」

傍から聞こえた声に反射的に、怒りをぶつけた。

その瞬間…だった。

「かわいいー！！」

っと、俺の家から飛び出してきた人が、なこの体に飛びついた。

その人は俺にとって大事な存在でもあるが、頭が上がらない苦手な人でもあった。

「げっ…綾ねえ」

「ふふ」

現われたのは俺の姉、水野 綾音（あやね）だった。

「少し玄関で見てたんだけど…詳しい話、聞かせてもらえる？」

俺はいやな予感がした。綾ねえがどちらの側につくかなんて…少し
感づいていたから。

そしてとりあえず、しょうがなく部屋になこを入れた後、
なこは綾ねえに誘われて、綾ねえの部屋話をしていた。
俺は何故かりビングで待つように言われ…数分後待ったところで
二人がリビングに入ってきた。そして言われたのがこれ…。

「なこちゃん、今日から住む事になったから！」

「…は？」

「だってかわいいじゃない？ほっとけないじゃない??」

「何で小天使の話を聞くからって部屋に入ってて、帰ってきたらそうなってるんだよ!？」
横から、ルルポンの笑い声が聞こえてきた。

「そこ！ミミって笑うところじゃないから!!」

「ミミ？笑ってないミよ？…ミミミツ」
っと言いながら、また笑うルルポン。

そんな怒る俺に背後に、ある奴の空気を感じた。
コイツめえ…小天使か恋届け隊か何か知ねえけど…

「あらためて、小天使なこ！あなたの恋届け隊として、今日からがんばります!!」
なこは俺に向かって言ったが、俺はにらみ返したが、
なこはそんな俺を見て笑顔を返してきた。
俺は思った…。

恋愛なんて、昔も今も嫌いだ…
こんな奴、絶対…認めねえ。

こうして、小天使なこと俺との生活が始まった。

第二話 アイツが学校にやってきた！

目覚ましのすごい音に起こされて、眠たい目を擦りながら

朝食を求めキッチンのリビングへ向かう。

自分の部屋から出た後、廊下を歩き、リビングのドアノブを握った。この時…俺は昨日の出来事が

夢であるように、今更ながら願った。

ガチャッ…

「ああ、久也起きたのね」

っと朝ごはんを食べながら綾ねえが言った。このまま終われば

いつもの光景だったが、やはり現実はそうはいかない…。

「あ！久也～おはよう！」

「…」

昨日突然家の前に現われて出会った、小天使の恋届け隊の一人…なこ、

なこに話しかけられた瞬時に、俺の眠気は一気に覚めた。

くそっ…。

「馴れ馴れしく呼び捨てすんなっ…俺は、お前を認めねえからな」

っと言ってなこをにらんだ後、チッと口を鳴らしてテーブル用意されている朝食に手をつけた。

すぐ後を追ってきては、子犬のような目をして甘えるような口調で

話しかけてくるなこ。

「じゃあ、私のこともなこって呼んでいいよ？ね？久也～！！」

「…」

俺は完全にコイツを無視することにした。そのうち居心地が悪く感じて、

この家から出て行くだろうと俺は考えたからだ。

しかしなこは運だけは強いようで…話に綾ねえが入ってきた。

「もう～久也ったら、なこちゃんにいじわるしてえ…話し合っとなこちゃんが

住む事になったんだから、いいじゃないの～かわいいのにい。」

何が話し合っって決めた…だ？その話し合いに俺は入ってないじゃないか！？

しかも可愛いとか、関係ねえだろ！！

そう、心の中で言おうか躊躇（ちょうちょ）したが…やめた。

「うるせえ…勝手に決めやがってっ」

「もう～」

俺が言うなり、綾ねえは困った顔をした。そして、なこの方を向き直し

違う話を切り出した。

どいつもコイツも、何でいつも俺が悪いって感じに仕立て上げるんだ？

俺はすでに怒ることを通り過ぎて、呆れ果てていた。

「ねえなこちゃん？なこちゃんは昨日もその制服着てたけど、もしかしてうちの久也と同じ高校だったりするのかな？」
「うん！今日から転入してくる予定なの！」
「まあ今日から？…親御さんは知ってるの？」
「人間界留学の手続きは出来てるの、校長ちゃんが自前に魔法をかけてくれたから！」
「魔法？…ふふ、面白いことをいうのね、なこちゃん」

こりゃダメだ…何となく会話を聞いていた俺だが、説明がなかったため綾ねえさえもなこのペースに巻き込まれようとしていたのがわかった。

「なこ！…お前、高校ってここから通う気か？」

「うん、そうだよ」

「ここっていうのは俺の家だぞ？」

「うん、そう」

うん、そうって…コイツわかってないのか？気づいてないのか？

同じ場所から通うということは…

「お前なあ？知らないもの同士が、同居するってことを言ってんだぞ？」

「ああ～そういえばそうね！…ふふ、おもしろ～い」

この姉…何を面白がってやがる…

意識的な問題はないが、第一見ず知らずの高校生が同じ家で暮らしてるってクラスでばれたら、俺は間違いなく悲観されるだろうって思っていた、コイツら…頭おかしいんじゃないか…

「とにかく、学校ではお前と俺は他人だ。俺とお前が一緒に住んでることは、絶対に秘密しろ！いいな？」

「久也がそう言うなら、私はどっちでもいいよ～」

「どっちでもいいんじゃないくて、そうしなきゃヤバイツつの！！」

コイツへの説明は…テスト勉強よりも難しいことが今わかった。

俺が疲れ果てた様子でいると、なこが口を開いた。

「そうだ！…ねえ、学校行く前にね、パートナーさんから

名字をつけてもらいなさいって校長ちゃんに言われたの！…だからつけて？」

もうひとつわかったが…なこの言う”校長ちゃん”とは、もしや学校の校長先生のことじゃないか？

コイツはそんなに校長と仲がいいのかって俺は別の意味でなこに驚いていた。

「名字なんて適当につければいいじゃん？」

「じゃあ、水野は？」

「俺の名字だろ！？それは！！」

なこはどうやら、一番最初に見た、俺の家の表札に書いてあった

”水野”という名字しか知らなかった。

「まあ、ゆっくり決めればいいじゃないの～名前の漢字は、奈良の”奈”に
子供の子で菜子でいいわね？今作ったのよ～私、奈良好きだし～子供好きだし～！！」
パートナーが作るというよりは、外野がすでに決めていた。
単純な発想過ぎて、ツッコミどころが満載だが
まあ…責任とか背負うのめんどくせえし、綾ねえに任せるか。

俺はリビングのテレビに、電源をつけた。
その時バラエティ番組がやっていて、ゲストに”神谷雅士（まさし）”というアイドルが
出てきていた。新人か…？

「キャーーーー！！」

「！？」

突然叫び声と共にリモコンを奪われ、ビックリした俺。

叫び声の主は、綾ねえだった。

どうやら、この様子だと熱烈のファンだったみたいだ…全然知らなかった。

「綾音さん、この人誰ですか？」

「なこちゃん知らないの！？今人気急上昇中の新人アイドル、神谷雅士くんよ～！！」

「へえーいいですね！ラブかも～」

新人か…なら俺は知らなくて当然だ、と俺は納得した。

しかし、なこは恋届け隊と自分で名乗っているが…ラブの意味わかって使ってるんだか。

やっぱり、認められない点多すぎる。

「そうだわ！なこちゃんの名、雅士くんからって”神谷奈子”ってどう？

やだあ～もう完璧～！！」

「神谷…奈子…。これがわたしの人間界での名前…！！」

わーい！！嬉しいなあ～！！」

由来は全て綾ねえの好きなものばかりだが…とりあえず

なこの名前が決まったのが、この瞬間だった。

ピンポン…

騒がしく話している間を、引き裂くようにインターホンが鳴った。

「はい…」と綾ねえが出る。

「あら、渉くん？」

渉？…なんで。あっ！！

無視するはずのなこのペースに、寄付がついたらすっかり巻き込まれていたことに
気が付いた。とっさに時計を見たら…やばっ遅刻する…。

「久也、渉くんだって～待ち合わせの場所待ってても来ないからって…」

「もういい！いってきます！！」

俺は綾ねえの言葉を遮り、急いで玄関に飛び出していった。

古い付き合いの親友でもある渉はすでに、靴箱辺りまで入ってきていた。

「おっす…今日は休みかと思ったぜ？」

「わりい、ちょっと昨日から変なことばかりあってさ…学校忘れてた。」

「なんだそれっ」っと渉はクスクスと笑う。

しかし、笑いながらふと下を見た渉は、玄関にある見覚えのあるローファーに気が付いたみたいで尋ねてきた。

「あれ？女性のお客さん？…といっても、これ高校生のローファーじゃね？」

「ああ…まあちょっと、綾ねえの知り合いで…あはは」

苦し紛れに単純な嘘をついてしまった。わりい渉…今はまだ言えないんだ。

そう心の中で一人呟いていた。

「な～んだ、てっきり彼女でも、出来たのかと思ったよ」

「まあ恋愛が嫌いな久也だし…あるわけないかとも思ったけどな」っと微かに渉は笑った。

「遅刻するし、いこうぜ…？」

「おう」

俺は恋愛系の話は苦手だ、それは渉も知っていた。

だから深く聞いて攻めたりもしないし、広めようともしない…こうして話を変えても渉は何も言わずに俺に合わせてくれる。

俺はそんな渉のことを、本当に親友として好きだった。

そして俺達は朝のホームルームに、間に合うように学校まで走った。

俺が出て行った後…家に残されたなこと綾ねえがこんな会話をしていたらしい。

後で聞かされた話だから、詳しくはわからないが…。

「じゃあ、なこちゃん！久也の私達もそろそ学校に行こうか？」

「一緒に行ってくれるの…？」

「もちろん、事情があるにしろ…私は昨日から、なこちゃんの保護者にもなるって心に決めたんだから！！」

「うわぁ…ありがとう！」となこは頬を赤らめて答えた。

「学校への手続きは出来てるみたいだけど…名前の漢字は昨日決めたばかりよね？それは知らせないといけないわね～」っと綾音は眉をよせて言った。

「ううん！昨日夜に校長ちゃんから電話があって…名前の漢字を魔法で登録したから、もう大丈夫なの」

「え？…そうなの？」っと戸惑う綾音だったが、「なら、いいか」っと軽く頷いて深く考え込まずに、その話題を流した。

もしかしたら、これが綾音の長所でも短所でもあるのかもしれないといつも久也は思っていた。

「いずれその”校長ちゃん”にもお話してみたいね…じゃあ、車で送っていくから、行きましょうか？なこちゃん」

「はいっ！！」

っと、とびきりの笑顔でなこは答えた。

こうして、なこも俺が通う高校へ向かった。

俺は学校までは、まさかこうなるとは思っていなかった…そして

今のこの渉との関係が、なこが学校に来ることによって変わるなんて

想像さえもする必要がないくらい…何も考えていなかった。

もしこの時未来に起こる事がわかったなら、あの帰り際…俺はなこのそばに

いられたのかなって、少し思ったりもする。

朝のチャイム…どうやら無事遅刻は間逃れたようだ。

しかしクラスに入るなり、少し騒がしい…。

「なにになに？何の騒ぎ？」っと渉が問う。

するとクラスの女子や男子は目を輝かせて

「新学期始まったばかりなのにさ、転校生だって！！」っと勢いよく答えてきた。

「へえ～6月だって言うのに、新学期早々何かあって転校してきたとか？

どんな問題児だよ」

渉は俺に向けてそう話を振ってきたが…心当たりがあるため

返す言葉に時間がかかってしまった。

時期はずれの転校生…朝のなこの転校の話…。

そういえばアイツ、どのクラスに来るんだっけ？

肝心なことを聞き忘れていた。俺は、なこの年齢を知らなかったことに今気が付いた。

アイツ…もしかして。いや…まさかな…そんな分けない。

あったら逆に困るし！！

この短時間で、俺の頭はそのことでいっぱいになっていた。

「久也？」っと突然の渉の声に、俺は我に返った。

「えっ？いや…どうだろうな」

「ん？…まあ、いいけど」っと渉は笑って、

「ちなみにさあ、それって男だろ？」と再度クラスの奴に問う。

「いやいや～今回は女子なんだよ！」

「女子？ああ…不良か…興味なくしたあ」

どうやら、渉は転校生に興味をしめしていた様子だが

不良は苦手らしい。ということは…なこみたいなアホも除外ということか？っと

俺の中で安心していた。

「久也、俺さ～可愛くて一生懸命な子がタイプなんだよ。

後ふわふわの天使みたいな子？守ってあげたくなるんだよなあ…」

「へえ…」っと俺はそっけなく返した。

この手の話はノリが悪い。それに昨日告白してきた女子に、何となくタイプが似ていて

思い出した拍子に気分が悪くなったから。

だが万が一のことも考えて、一応渉に聞いてみることにした。

「そのタイプが超アホでもさ、もし普通の人間じゃくても…好きでいられんの？」

「ん？珍しいな…久也が恋愛話に乗ってくるなんて、そうだなあ…まあアホ過ぎたらお手上げかな、それにライバルとかいたらめんどくさいし？」

「へえ…」っと次を要求する俺。

「俺は平和主義だからさあ～そこまで恋で必死になるとか考えられねんだよね」
その考えには俺も同感、誰かのために自分が傷つくなんて、むしろ損してるしか思えなかったから。めんどくさいことは嫌いだ。

「だよな？…やっぱ渉とは話が合うわ」

「そう？そりゃどうも～」っと二カッと笑って渉は返事をした。

その時、教室のドアが開いた。

クラスの奴らは急いで席に着く、俺も渉もつられて席に着いた。

「おはよう！…ホームルーム遅れてわるいな」

担任がそう叫んだ。俺のクラスは2年A組で担任は男性、名前は橋本 敦

人柄を例えるなら…アックスできれいに整った髪形に

ややがっちりした体育会系の、30代越えの中年男性と長いが言ったところだ。

まあ少々暑苦しいが、明るいところは嫌いじゃない。たまに優しいところもあるし。

橋本は俺達生徒を見るなり、渉の隣の空き席を見て軽く頷いた。

「せんせ～い、どした？」っと渉が尋ねると、橋本は話し出した。

「突然だが、このホームルームでは転入生を紹介することになった。

はいって来い！神谷」

「は～い」

ん？…神谷？？

偶然ながら、神谷ってなこにつけた名字だよな。神谷さんってそんなに多いのか？

そんなことを思いながら、まさか…っとドアから入る姿に顔を向けた。

「げっ…」

「あっ…」

何故か渉と同時に声を出していたが、そんなことはどうでもいい。

今は起こってほしくない現実が起きて…何もいえなくなってる自分に戸惑った。

「神谷、さっき教えた自己紹介だ」

「神谷奈子です！つい最近この世界にきたばかりだけど、仲良くしてくださいね！」

嫌な予感的中、コイツ…ウチのクラスにきやがった…。

なんでA組B組C組D組とあるのに、出来た話みたいここなんだよ！？

「はあ…」っと怒鳴ることも出来ず、俺はため息をついた。

「席は今見たところ、村上の隣が空いてるな？じゃあ、神谷はそこに座ってくれ」

「は〜い」

となこはゆるく答えて席に向かった。

なるほど…さっき見てたのはなこの席を探すためだったのか、にしても大事な親友の隣だなんて…何をしでかすかわからない、俺は心配だった。

「神谷さん、かわいいね」

「思っていた以上にいい子かも」

「俺友達になろっかな」と、耳に驚く言葉が入ってきた。

なこは、肩につかないか程度の髪の長さで大きな目に、笑う頬を赤らめる。

肌はわりと色白で…何故かコイツには、人を取りこにしまうオーラがある…

そのせいなのか、朝の俺も…変なことを言ってしまったし、

どうやらクラスの連中もペースに乗せられたみたいだ。

これが小天使ってやつのチカラか…？っと俺は少しこの時から警戒した。

だが、時期にこのオーラにはまるのは俺以外にも、現われることにこの時

気が付かなかった。いや…もしかしたら、気づきたくなかったたのかも。

「じゃあ、さっそく国語の授業を始める。神谷、初日だし…教科書がない場合は隣の村上と席くっつけて、見せてもらえよ？」

「は〜い！」

となこは明るく答えると、渉に話かけた。

「私、神谷奈子！よろしくね」

「おうっ俺は村上演！神谷さん、かわいいね？…自己紹介のときマジで見とれちゃったし」

「うん？あっそうだ！教科書見せてもらってもいい？」

「ああ…いいよ？」

「ありがとう！村上くん感謝〜」

「いや…」っと、渉は少し恥ずかしそうに答えた。

「席くっつけるね〜」となこがドンと机を動かすと、

「え！？こんなに…？」っと渉は驚いた。

「だって見えないもん、いやだった…？」っと甘えた声でいうなこに、渉は「いやっ…」っとそっけなく答えた。

なこと渉は俺の知らないところで、そう会話をしていた。

その後、授業終了のチャイムがあっという間になった気がした。

俺の頭はアイツのこといっぱい…集中なんて出来なかったからだ。

しかし、今日一日はまだ予想以上に長く…これから起こることを

俺は想像もしていなかった。

そして、ただひとつ考えていたのは…なこが俺に恋をさせようとしていること。

俺は恋なんてする気はないし…大嫌いだ。

そう…あの出来事以来、「好き」という感情を俺は、捨てたのだから。

第三話 久也の秘密 恋はステキ

午後の長い授業が終わり、下校の時間になった。

午後の授業さえも長く感じてしまった原因の一つは、そうアイツ…

放課後になるたびに、「久也！恋を探しに行こう？」っと俺の席に来ては同じように言ってくるなこ。

クラスの連中からは変な目で見られるし、渉はちょうどいなかったからよかったものの…

俺の考えは予想外に的中して、かなりの不満が溜まっていた。

でも…この後、俺は我慢が出来ずしでかしてしまった。

いつなら、渉をさそって帰るはずだが…アイツが隣にいるせいか、気が進まず一人でもた帰ることにした。

俺はそそくさと教室を出ようとした…しかし、一番話しかけられたくない奴に話しかけられた。

「久也？どこいくのー？わたしもつれてって！！」

「え？…久也、神谷さんともう知り合いだったんだ？」っと少し驚いた顔でこっちを見る渉に

「いや…」っと俺は短く答えるのに精一杯だった。

ピンチだ…この状況で、アホなアイツ…なこのことだ、何を言い出すかわかんねえ。

「わたしは久也の恋届け隊なの！…だから、久也にステキな恋を届けるのがっ」

「ああー！！」

とっさに勢いよく叫んでしまった…。渉にこんなこと言ったって、わかるはずがないから。

「恋届け隊って…」

「いや、何もないんだ…なことは昨日知り合ったばっかだから…」

「ふーん…てか、久也って恋する気あったんじゃない、あのことはもう大丈夫になったんだな？」

「あのこと…？」

渉がこんなことを言うのは初めてだった。いつもならここで恋愛の話を広げるなんて…

してこなかったから。むしろ、触れてくるほうが考えられないくらい。

あのことが俺の心の中でよみがえる、徐々にイライラが募り…ふと見たなこの顔を

アイツと重ねるように…にらんだ。

「久也…わたし、久也にステキな恋をしてほしいの、だからっ」

「うるせんだよっ！」

悪気はないが…押し付けがましいことすごくうっとうしかった、

その気持ちが抑えきれずに、声となって叫んだ。

「俺は恋なんてしねえ…必要ないんだよ！？」

「…ごっごめん…あのね、久也」

「めざわりなんだよ！！…俺はお前を認めてねえからな！？」

「…久也」っとかすれた小さな渉の声が聞こえた気がしたが、どうすることも出来ず

泣きそうな顔をしたなこの目の前から、とにかく場所を変えたくて

勢いよく教室のドアを開けて、俺は屋上に走った。

取り残された渉となこ。クラスメイトの目線から守るために

「どうしたんだろ～？久也今日はご機嫌ななめかな～」っと軽く大きな声で一人事を言った。そのおかげかクラスメイトは、少し安心した顔で散らばっていった。

その様子を見て、渉はなこに話を切り出した。

「神谷さん、ごめんね…俺…なんか珍しく変なこと突っ込んだから…」

「ううん…村上君のせいじゃないよ？…わたしがしつこかったから。」

となこが苦笑いすると、渉は複雑な心境で話を続ける

「お互い名前と呼ぶ仲なんだ？」

「久也は嫌がってるけど…わたしが呼んでるの」

「へえ…」

「うん」

渉はこの時、自分が久也に言ってしまったあの出来事の話…そして、

何故かわからないがなこへのモヤモヤした気持ちが…心の中でぐるぐるとまわっていた。

久也と神谷さん…俺の知らない…何かがあるんだ。

そう思うとふと、決心がついたように渉はなこを見た。

「久也がどうして、恋愛嫌いになったか…おしえてあげようか？」

「え…恋愛嫌い？」

「あれは…久也が高校1年に入ったばかりのときで、俺と知り合って間もない頃だったかな」

そう、渉はなこに久也の過去を話し始めた。

高校入学したての頃の久也は、ごく普通の男と変わらなかった。

ずば抜けてるのはルックスだったかもしれない。恋愛の話もこの頃は進んで乗ってきていた。

「渉、誰かいい人いないか？」

「そうだな…C組の宮崎さんなんてどうよ？」

「あんま知らねえじゃん…もっと身近な奴は？」

「今のところはなあ…」

「ふーん」っと久也は返してきた。

こんな感じでよくやり取りをしていたこの頃…しかしその次の日だった、久也を恋愛嫌いにした例の女子が現われた。

それは丁度さっき久也ともめた…偶然にも下校時間、

俺と久也は帰る支度をし、少し話をしている時だった…。

俺の元友達、宮代姫乃（ひめの）と久也が出会ってしまった瞬間だった…俺は今でもすごく後悔している、久也に姫乃を紹介したことを。

だから、いつも恋愛話をしたとしても…深く聞き込むことはしなかったのだ。

教室のドアが勢いよく、大きな声と共に開いた。

「渉ーこの前借りたCD返しに来たよ〜」

「お！姫乃じゃん、よう！」

「ん？カッコイイ人だね…渉の友達？」っと姫乃は久也に興味をしめした。

「ああ！紹介するよ、俺の親友の水野久也ね！」

「どうも…よろしく」

この時も久也是無愛想だったが、今みたいに一方的に女子を悲観するようなことはしなかった。

そんな久也のノリも気にせず…姫乃は明るく話を続けた。

「わたしはね、渉の腐れ縁みたいなものなの一宮代姫乃ね！よろしく！！」

「そっかぁ〜以外と二人って会ってなかったよな〜」っと、俺が言うと

「俺は初めてだよ」と久也がそっけなく返す。

「わたしも〜」と姫乃も言った後で、予想外のことをこの後言い出す。

「ねぇ、久也って呼んでいい？わたしも姫乃でいいから！…にしてもさ、久也カッコイイよね〜彼女とかいるでしょ？」

「それがいないんだよな〜」っと俺は久也のかわりに返した。

「いないの！？うわぁ〜マジ狙っちゃおうかな〜なんて」

姫乃は笑いながらそう答えた。俺は次のひとことを付け加えようとしたが…

「あっ友達待たせてたんだった！じゃあ〜渉に久也、またね！！」

と言って、姫乃はそそくさ足早に教室を後にした。

いなくなったのを確認し、俺は久也に話を切り出した。

「まったく…あいつは〜また軽はずみな言動を…」

しかし、「やばい…渉」と久也が逆に呟いた。

「なにが…？」

と俺はこの時は気が付かず、拍子抜けのような声で聞き返した。

「一目ぼれしたかも…」

「…え？」

俺は耳を疑ったが、久也の顔を見た瞬間すぐわかった。

さっき紹介した姫乃のことが…久也は好きになってしまったらしい…

しかし俺には都合が悪かった、何にしろ姫乃には…

「あのさ、久也？姫乃は…」

「ん…？」

俺はこの後の言葉が言えなかった…。

この時俺のほうを見た久也の目が…本気で恋をしているってそう教えられた気がしたから。

「いや…また今度言うよ」

俺はまた次回でも言えればいいって軽く思っていた

まさかあんなことになるなんて、思ってもいなかったから。

後日…

「は！？…告った！？」

「……一応ダメもとで」

久也は恋愛になると、どうやら積極的なほうらしい。

「話を聞いてからのほうが、傷つかずにすんだのに……早すぎるっの」

「傷つく？……よくわかんないけど。」

「振られたんだろ？無理しなくていいって」

「何でもう決まってるような言い方すんだよ？」

「だって姫乃はっ……」

「いいよって言われた」

俺の言葉を遮るように、久也が少し大きめの声で言った。

その言葉に俺は耳を疑った……だって、姫乃にはもう

「何かの間違いじゃね？この際だから、はっきり言うけどさ」

「なに？」

「姫乃は彼氏がいるんだぞ？……そんな奴がどうして、いいよって言うんだよ」

「今の彼氏とは別れるって、言ってた。」

「へ！？……この前デートしたって言ってたのに？なんで??」

と、問い詰める俺に対して、久也は赤くなる頬を隠すように下を向いた。

「よくわかんねえけど……俺のこと、思ってくれてたみたいで……」

「……両思いだったわけ？」

「俺の口から、言わせるなっ！！」

「ふーん……よくわかんないけど、ま、よかったじゃん？」

「うん……俺、大切にする。」

ここまではよかった、この数日後……二人は無事付き合いだした。

どっちかという……姫乃のほうが受け身で、久也の気持ちのほうが多く感じられたが

仲良さそうにしていたし特に気にならなかった……しかし、

ある日久也に呼び出された放課後……意外な真実を知った。

「渉……俺さ、どうしたらいいんだろう……」

「ん？……ああー幸せ過ぎて怖いってやつ？」と、俺はこの時軽く答えた。

「俺……姫乃のこと、好きだよ……でも、好きになればなるほど辛い……」

久也はうつむいた後、顔を上げてこっちを見た……その時の顔を見て、俺はやっと気が付いた。

そこにあったのは……両思いの幸せそうな彼氏の顔ではなく、

寂しげな……疲れ果てたもどかしい顔の久也だった。

「どした……？うまくいってないのか……？ケンカか？」

「ケンカはない……うまくは言ってると思う、たぶん」

その”たぶん”と付け加えた言葉に、俺は疑問を抱いた。

何かがおかしい……。

「久也……俺には正直に話してくれないか？俺はお前の味方だからな……？」

「ありがとう……」っと久也は掠れた声で言い捨てると、目元に手を押さえた。

久也の体が自然と震えているのが…伝わってくる。

「久也…」

「俺愛されてるって、思い込んでただけなのかなって思ってさっ…」

「うん…」

「姫乃は優しいし、いつもどうりに接してくれるから…悪くなんだよ？…」

「うん…」

俺はうなづくことしか出来なかった、しかし次の言葉だけはうなづけなかった。

「俺は姫乃が好きだよ…でも…男遊びとか…それは辛いんだよ…」

「え…！？」

この言葉を聞いた時、初めは信じられなかった…あの姫乃が

ありえないって思ったから。でも…久也の様子を見る限り…それも言い切れなくなってた。

「どういうことだよ…」っと俺は搾り出すように、言葉が続けた。

「別れるって言ったのに…俺と付き合いだしても、まだ付き合ってる…しかも、毎週休みの人か…よく男友達と遊んでんだよ…」

「遊ぶって、それくらいはさあ」

「ただの遊びじゃない、手繋いだり…他にも言えない事してたらしい…」

俺の姉貴が…駅の公園で見かけたんだってさ…だから、嘘じゃない。」

「…そか…」

俺は言葉を失った。久也は震えながら泣いていた…これ以上言ったら

傷つけるだけだと思ったから。それに…友達の意外な一面にショックを隠しきれなかった。

久也のお姉さん、綾音さんは嘘を言う人じゃないことぐらいはわかったいたし。

「何度も別れてくれって頼んだけど…”今話し合い中”しか言わないから…」

俺は一つ、決心した…親友の久也がこうして泣いている事…

俺は耐えられなかったから。

「久也…俺が姫乃を話をしてみる…」そう最後に久也に呟き、俺は姫乃がいつもいる渡り廊下に向かった。

「涉じゃん…どうしたの？」

姫乃は知らない男子と一緒にいた、俺はかまわず切り出す。

「話があるから、姫乃少しいいか？」

真剣な顔をして、俺が言うと姫乃は笑った。

「そろそろ来るかなっとは思ってたけど…いいよ？」

「先に教室行って」っと男子生徒に姫乃はいい、俺と姫乃だけ

この渡り廊下に残された、無意識に重い空気が漂う。

しかし俺は、勇気を出して口を開いた…親友のために。

「お前…久也のこと大事にしてやれよ」

「ん？してんじゃん？…付き合ってるし」

「ちげえよ！…何でまだ付き合ってるんだよ！？…他の男とも遊んでるって
どうゆうことだよ！？」

剣幕に言う俺とは対照的に、ケラケラ笑みをこぼしながら余裕な表情の姫乃。

「久也のこと好きよ？…でもさあ、何かつまないし？…あきちゃうんだよねえ」

「はあっ！？」

姫乃の態度を見るたびに、怒りが増すのがわかった。

「顔はいいから、別にいいんだけどね…初めは渉の友達だし我慢してたけど、
でもそろそろ限界かなあー」

姫乃の言葉に、俺は「え…」と答えるしかなかった。

限界って何だよ…！？お前より…久也はどれだけ辛い思いをしたと…。

「久也は渉に返すよ、しがみ付かれるとめんどくさいし…本人に”バイバイ”って
伝えといて？」

「バイバイって…久也、捨てる気かよ！？」

「あとね、私引っ越すことになったの。携帯も変えるし、番号教えてほしいなら
教えるけどお？」

「いらねえよ…お前なんか…最低だ、見損なったよ！！」

「あっそ、じゃあ今までどうも。さようならっ」

と姫乃は言い捨てると、次の日から学校に来なくなり…気が付いたときには転校していた感じ。

俺は、久也に真実をその後話したが、久也は何週間かその日から、学校を休んだ。

携帯に電話しても出なかったし…家に行っても留守だった。

そして1ヶ月が開けた頃…

「…久也！？」

「…よお」

久也が久々に学校に来た。

「休みが多いから、心配したんだぜ？」

「わるい…な」笑って返す久也に、俺は胸を撫で下ろした。

もう元に戻ったんだなって、思ったから…。

しかし俺が無意識に言った言葉で…違うことがわかった、

「じゃあさっ新しい恋でもしようぜ？そうすれば今度はさ！！…」

「しねえよ…？」

その言葉に体が凍りついた。冷たい瞳で俺を見る久也…

そうこの時から、久也は恋愛が嫌いになった。

そして戻ったのではなく…変わってしまった事に俺は気づかされた。

「久也…お前…」

「俺は恋愛なんて…大嫌いだ」

その頃から、恋愛に関して話すときは…久也はいつもあの

冷たい瞳で無表情になるようになった。

突然の話を聞いて…啞然と立ち尽くしているなこ

「神谷さんは悪くなんだよ…？でも、久也はもう」

「違うよ…？」

渉はなこの言葉で、言いかけた言葉を呑み込んだ。

「違うって…なにが？」

なこは真っ直ぐに渉を見た、渉はその瞳の輝きに胸が少しだけ騒いだ。

「恋はステキよ？…久也は、傷ついてそれを忘れちゃっただけなの」

「…」

「わたしが、久也に届けてあげる！…その恋を超えられるぐらいの最高の恋愛を！！」

そういうと、なこは勢いよく教室のドアを開いて出て行った。

「あっ！神谷さん、どこに！？」っと渉が言うと

「久也がいる場所！！」

それだけ答えて、なこの姿はなくなった。

「屋上か…。」

そう呟いて、圧倒される渉は心で微かに思っていた…

神谷さんと久也って…二人はどんな仲なんだろう。

屋上は、風にあたるのに一番いい場所だ

俺はあの時も屋上で泣いてた…今は泣くなんてことはしないけど、

同じことを繰り返すように、この壁にぶつかるたび

この屋上に逃げてきている気がした…。

「くそっ…」

どうして人間は子孫を残すために、相手を必要とする仕組みを

使ったのだろう…。そんな風にしなきゃ、こんな思いすることなかったのに。

しかし、俺は男だ。女は子供を生むために恋愛をする必要があるかもしれないけど

男にはそんな労働はいらない、寂しいなんて思わない以上…

恋する相手なんて、そもそも恋愛なんて必要ないことだ。

屋上からのグラウンドを見下ろしながら、そんなことを思っていた時

力強く誰かが、屋上に入ってきた。

「久也…話したいの、いい？」

またお前かよ…。

ハァハァと息をするなこは、呼吸を少し整えた後

「あのね」っと切り出した。

まだ聞くなんて言ってねえし…。

「わたし、絶対に久也に幸せな恋を届けるから！」

「またそれかよ…だから、俺は恋なんてしないってっ」

「違うよ！！」

俺がしゃべりかけたのを止めるかのように、なこが大きく叫んだ。

「なにが違うんだよ・・・？」

女なんて、どうせ最終的には同じ考え・・・。

そう思って言い返したつもりだ

でも、なこの返す言葉は俺の心の中に・・・何故かすごく響いた気がした。

「恋はステキなんだよ？幸せなんだよ・・・今は無理かもしれないけど

久也がラブラブしたくなるような恋をさせてあげる。」

「だから・・・」といったなこの顔は、不思議と胸にこみ上げる何かを刺激した。

「わたしにまかせて？」

この笑顔にはどうしても勝てない、何故かわからないが。

俺はやや赤くなる頬を手で隠した。

「やれるもんなら、やってみろっ・・・」

そして精一杯の言葉を言い返した・・・。

第四話　まりあと渉　夏のいたずら

月日はあれから目覚しく過ぎて…気が付けば真夏の目前まで来ていた。

毎日本当に、暑い……。

俺はあれから、なこの事は少しだけ認めることにした。特に、恋をするというのを承諾したわけではない。

ただ…まあ、ほっとけないって言うのか…うまくは言えないが

同情の気持ちとして家に住ませることにしたのだ

綾ねえもしつこく言ってくるし、この方がめんどくなくていいだろ…。

そんなことを考えてる、土曜の休みの朝食…なこの声が俺の耳に入ってきた。

「部活の試合？…見に行きたい！！」

またもや綾ねえが余計なことを吹きかけてる様子だ…

たくっ…人の気も知らないで。

「あのなあ？渉は俺の親友なんだよ！余計なことしでかしたら、ただじゃすまないからな！」

「もう…久也は渉くんが大好きなんだから」

「気持ち悪いこというな！！」

と…言っても、好きなのは確かだけど。

「渉くんの野球部の試合、今週の日曜日でしょ？学校はないし、いいじゃない」

「そういう問題じゃなくてっ…」

「久也…」

俺の言葉を、またしてもなこの言葉が遮った。そしてまたあの瞳で俺を見る。

「渉くんが野球する姿が見たいの…ダメ…？」

うっ…またこのパターンだ。他の女に同じ事をされてもへっちゃらなのに

何故かなこにやられると、胸の辺りが熱くなる…これが小天使のちからなのだろうか？

「ああもう！！…わかったよ」

「あら、久也ったらなこちゃんにメロメロなのねえ？」

戸惑うことなく「ちげえよ！！」と俺は即座に否定した。

「コイツは言い出したらしつこいから…それに、俺も渉の応援しに行きたいし」

なこのためじゃない…渉のため、心の中でそう思っていた。

「じゃあ3人で行くことに決定ね？」

という綾ねえの言葉に、少し反応した俺。

「三人？綾ねえも来るのか…」

「わたしも渉くん好きだもの一、いいわよね？」

「まあ…いいけど」

俺は綾ねえには頭が上がらない。理由は、話すと長くなるから言う気力さえないけど。

でも、俺にだって主張ぐらいする権利はあると思った。

「ただし…俺は途中から1人で、別行動とるから」

綾ねえは苦笑いしながら、俺を見た。

「また寂しいことってえー…まあ、いいわ、わたしは日曜日の7時ぐらいに用事があるし…ささっと済ましてから直行で向かうから。先に、学校の校門でふたり待っててくれるかしら？」

「綾音さん、了解です！」

「コイツと待つのかよ…すぐ来いよ？」

「わかってる、わかってる！」

綾ねえはにんまりと笑いながら、うなづいてそう返事をした…

そんなこんなで、渉の野球部の試合を見に行くことになった俺達。

そしてその日曜日は、あっという間にやっていた。

約束の時間になって、校門の前で待つ俺達。アイツのうるさいペットが騒いでいた。

「久也ー！！綾ちゃんはまだミー？」

昨日は見かけないと思ったら、今日は現われやがった…。

俺はそいつをにらんだ

「てめえ！っ何でいんだよ！？昨日はなこのところになかったじゃないか！！」

「久也やめて！！…ルルポンは、てめえじゃないよ？」

なこは困ったように、眉をよせて俺を見る。

「じゃあ、そのルルポンさんが何で昨日はいなかったのに、今日いるんですかー？」

俺は嫌味のように言い返す

「ルルポンは昨日も、久也の家に泊まってたミ」

「はあ？てめえどこにもいなかったじゃねえか！！」

「ルルポンは、昨日は天界から来て…疲れちゃったから、一日中このフェアリーコンパクトに、略してフェアコンね？しまってたの」

一日中寝るってどうゆう生態系してやがるんだ…この飛んでる生き物、てか、人間界にいるときは一生そこにいてくれないかと

俺は少し思った。

にしても…

「てか、人間に見えて大丈夫なのかよ？まずいんじゃないの？」

「うーん…大丈夫だよ？」

なこが考え込んだ後、そう答えた。

「ルルポンみたいな精霊は、小天使、天使…あとそのパートナーの続柄じゃない限り姿は見えないって校長ちゃんが言ってたもん。行動によるは振動は、外に伝わるらしいけど！」なるほど…だから、俺にもちろんのことなこも、綾ねえも見えるわけだ。てことは、学校につれてきたとしても大丈夫そうだな…俺はほっとした。

「にしても…綾ねえ遅くないか？」

「そうかも！どうしたんかな…？」

人も増えてきたし、そろそろ鑑賞の場所取りをしないといけない……

綾ねえどうしたんだ？

俺はそそくさと、ポケットに入っていた携帯を取り出し

綾ねえに電話した。

二回ほどコールが鳴り響き、綾ねえが出た。

「もしもし……あ！久也！？……ごめんね遅くなっちゃって」

「どうしたんだよ？待ってんだけど」

「いや～あのね？どうやら遅くなりそうだから、なこちゃんと二人で鑑賞しててくれない？」

「は！？」

コイツと二人で鑑賞？しかも変な精霊付きで??

冗談じゃない。コイツラと二人で見るぐらいなら、一人で見たほうが断然ましだ！！

「ふざけんな！コイツラと見るぐらいなら、俺は別行動とるからな？」

「また意地悪なことってえ～なこちゃんが可愛いくせにい」

俺は綾ねえの言葉にビクッと反応して、俺の携帯越しの近くで耳を澄ましている姿のなこを見た瞬間顔が熱くなるのを感じた。

なっ何を言って……。

「かっかわいくねえよ！？」

俺はむきになって怒鳴った。

「あはは、ま、とりあえず！少したったらいくからよろしくね。なこちゃん、初めてなんだから迷子にならないように捕まえてなきゃだめよ？……じゃあね！」

「あっ綾ねえっ」

話しかけたときはすでに通信は切れていた……さて、どうするか。

本当なら帰りたいところだが、親友の渉の応援きたんだ。帰ることはできない。

「久也ー？綾ねえさん、なんだって？」

「早く教えるミーこの乱暴モノ！みみみ……乱暴モノって……久也にぴったりのあだ名ミ」
くそっ……なこは拍子抜けするぐらい能天気な感じだし、

精霊は人をけなしては、一人で笑ってやがる……今に見てるコイツらめえ。

俺は大きな咳をした。

「聞けおめえら！……今日は綾ねえが来るまで、俺がお前らの面倒を見てやるから。

おとなしくついて来いよ！！」

「別に面倒見てもらわなくても、生きていけるミー」

「てめえ……」

俺の中で、精霊というイメージの中に……コイツは論外だとこの時認識した。

どうやったら、こんな性格に出来上がるんだか。

「ルルポンだめだよ？今日は久也の言うこと聞こう？」

今日はってなんだ！？

そんなこんなで、渉の試合が始まる前に場所取りへ向かうため
俺はすたすたと歩き出した。

「久也待ってよ！！…歩くの早いよ～！！」

「うるせっこれ以上近づくな！！」

「うう～」

なこは甘えるようにまたあの瞳で俺を見た。

うう…いつも引っかかると思ったら大間違いだ、俺は前だけを向き
今より早足で歩いた。

数分後…ようやくいい場所を見つけ、持っていた鞆の中のレジャーシートを
取り出し地面に敷く。こんなときこそ役に立たなきゃいけないのに
なことルルポンは何をして…うん？

「あれ…あいつら、どこ行った？」

俺はこの時ようやく気が付いた、イライラするのに惑わされて
あいつらを置いてきてしまったらしい。

「やべっ…綾ねえに叱られる…」

ルルポンはさておき、なこの事だからたぶん道に迷っているのだろう…。

一応あいつも女の子だし、めんどくさいが…探すしかないか。

「たくっあいつは何なんだよ…もう」

探しにいかうと俺は勢いよく、後ろを振り返った。

その時…

ドサッ

いるなんて思いもよらなくて、そこに立っていた女の子と衝突してしまった。

「いってえ…たくっ何なんだよ今日はあー」

「ごめんなさいっお怪我はありませんか…？」

「うん…？」

その時、その少女の背中から薄ピンク色のキレイな羽が見えた
まるで…あの時見たなこのように。

この少女はパーマがかかったようなふわふわしたロングの髪に
トロンと、憎めないような癒し系特有のたれ目をしていた。

丁度年齢は、同じ年ぐらいの少女だった。

「あの…本当に大丈夫ですか…？」

「え…あっ！？ああ」

俺はどうやらボーとしていたらしく、近づいてきた彼女の顔に
はっとして我に返った。

「私…実は迷子になっちゃって、それでついフラフラと…」

「ふーん、俺も偶然連れが迷子になってて…今から探しに行こうと思って」

「まあ！じゃあ、よかったら一緒に探しませんか？

私のパートナー…村上渉くんって人なんですけど」

「渉？俺の友達だよ…てか…パートナー…？」

「そうなんですか！？…よかった…知ってる人いた…。

とりあえず試合が始まってしまいますし、急いで探しに行きましょう！」

パートナーという件が気になったが…今はそれどころじゃなかった。

「わたしの名前はまりあ、立花まりあっていいます。

あなたの名前は…？」

「俺は水野久也だ…」

「そうですか、年近そうだし久也くんがいいかな？…久也くんの探してる相手は
どういう名前の方なんです？」

俺は初めルルポン名前を言おうか迷ったが、言えないと思った。

さっきこの少女にも、なこと同じような羽が見えた気がしたが

まだそうだと核心はないからだ。

「なこ、神谷奈子って奴…探してるんだ」

「なこ？…私の友達と同じ名前ですね、すごい偶然！！

じゃあ、行きましょう」

「とりあえず、渉なら試合前だし…野球部の部室の近くにいると思うから、
まずはそこに行こう。」

「はい！」

まりあの友達となこが同じ名前…聞いた始めはそんなに気にならなかったが
後で思えば、俺は鈍感すぎたのだと…つくづく思った。

こうして俺とまりあは、まりあのために渉のもとへ…

そしてその途中でなこを探すために、野球部の部室まで走り出した。

その頃なこ達は、人の多い通路を彷徨っていた。

「ルルポン、ここどこだろ？久也はいなくなっちゃったね…」

「足が早すぎだミー、綾音ちゃんに言いつけてやるミ」

「悪気はないから、言っちゃだめだよ？」

どこに行ったんだろ…久也…。

なこが歩きながら、考えていると耳から、笛の音が聞えてきた。

「何だミ？」

「あっ渉くんだー」

どうやら、ウォーミングアップのキャッチボール中の選手達にを見つけたらしく、
その中に渉がいた。なこ達は見つける次第に、勢いよく話しかけた。

「渉くん！！」

ウォーミングアップの相手のキャッチャーが、なこの声に気が付いた。

「あれ…あそこで呼んでる女子、渉のこと呼んでねえ？」

「え…神谷さん？」

少し経つと、なこの元へ渉が歩いてきた。

なこの前に立つなり渉は、少し赤らむ顔を隠すように
下を向きながら、なこに話しかけてきた。

「神谷さん、どうしたの？…もしかして応援に来てくれたの？」

「うん！でもね…久也とはぐれちゃって。どこにいるか知らない？」

「ああ…久也も一緒ね、なるほど…」

「どうしたの？」

「いや…なんでも…ない」

なこの言葉に、苦笑いして答える渉。

「俺も連れを招待してるんだけど…いなくてね」っと、別の話題を切り出した。

「連れ…？」

「神谷さんと同じ迷子かも…」

「同じだね」

となこは笑って答えた。

「迷子になったのは久也のせいだミー」

ルルポンがこっそり話しに入ると…なこはこそっと

「そういうこと、言っちゃダメでしょ？…」っと言った。

「渉には見えてないから、平気だミー」

ルルポンがそう笑っていると…渉はなこを見てぼかんと口を開けていた。

「神谷さん…なんで、小天使の精霊を連れてるの…！？」

「え…」

なんで…渉くんは普通の人間のはず…どうして見えるの？

なこは頭の中で混乱していた。

どうやら、渉には普段見えない精霊、ルルポンの姿が見えるみたいだった。

渉はハッと何かに気が付いたように、なこの方を真っ直ぐ見る…。

「もしかして…神谷さん、小天使なんじゃ…」

「わたしは…」

なこはいやな汗をかきながら…言おうとした、その瞬間だった。

ゴン…と鈍い音が響き渡り、

なこの頭に激痛がはしった。

「神谷さん！？」

渉が名前を呼ぶ中、なこは痛みに耐えられなくなり

地面に座り込む。どうやら、野球部のキャッチ練習のボールが

的をはずれなこの頭に直撃したようだ。

「いたたっ…」となこは頭を押さえた

「大丈夫？神谷さ…ん」

渉がなこに近づこうとした瞬間、なこの見上げた顔に
渉は目を奪われた。

そして純白の翼が、青空の光に反射して眩く輝いた。

「天使…あ！」

渉は無意識に言った言葉に、恥ずかしそうに「いや…」と答えた。

「渉くん…どうしたの？」

真っ直ぐなきれいな瞳で、なこに顔を覗き込まれ・・・あたかもなく
顔を真っ赤にする渉。

「やべっ…悪い、なんでもないから！！」

と顔を片手で隠すなり、なこに叫んだ。

「何の騒ぎ…？」

「女の子にボールが当たったみたい」と外野の人が

さっきの出来事で騒ぐ中

久也とまりあが、その騒ぎに気が付いて

こちらに寄ってきた。

「何の騒ぎだ？…て、なこ！渉！？」

「なこちゃん！？」

「まりあちゃんだ…」

「え…神谷さん、まりあのこと知ってたの？」

渉は顔を合わせるなり、なこやまりあのリアクションに驚く。

「なこちゃんは、前に話してた小天使の友達なの！…よかった、

渉の友達のパートナーだったんだ…しかも、久也さんの」

と、まりあは顔をほころばせた。

「何で、久也はまりあと？」

「迷子だっていうから…ここまで探しに来たんだよ、ついでにその奴も
いなくなったから探しに」

久也の言葉に少し、むっとする渉。

「神谷さん、小天使だったんだ…しかも久也の…」

「ん？…渉？」

久也はこの時、渉が初めて見せた表情に

言葉を失った…それは真剣な瞳だった。

「俺さ…好きになっちゃった…」

「…へ？」

試合が始まる笛の音した。

暑い日差しが、久也の体を熱くさせる。

その前に渉の言葉に久也は、頭を熱くさせていた…

想像以上の言葉に、混乱していたから。

「神谷さんのこと…好きだ…」

渉は、久也を真っ直ぐ見てそう呟いた。

なこと出会って、最初に訪れた季節

始まったばかりのこの夏は…俺に変ないたずらをした。

第五話 林間学校 いつもと違う距離に…？

その後、彩ねえも合流して試合が始まった。

試合の結果は、2－3で渉のチームが見事勝利。

最後に渉が決めた2ホームランで逆転勝利となったわけで

俺的には嬉しいはずだけど、何故か心は喜ぶことはなかった。

帰りは渉に会うことは出来なかった、レギュラー選手は忙しいらしい

だから、彩ねえと俺となこ、ついでに精霊も連れて歩いてきた。

俺の心が喜べなかった理由は、それよりも試合の前に聞いた渉の言葉に

頭はいっぱいになっていたから…。

別に渉が誰を好きになろうと親友として応援するつもりだ、

でも…何故かなこにだけは、好きになってほしくなかった…

どうして？…まあ、なこが変な奴だから、渉へには近づいてほしくないって気持ちだけか。

むしろ、渉となこがくっつけば…なこは渉に夢中になって俺は無理やり

恋させるって強制させられないわけだし、これはどっちかというと

ショックを受けるより好都合なんじゃないか？

だけど…なこが渉に夢中になるってことは、もう俺のところには戻ってこないってこと？

…いや、別にいいじゃないか、今はそれを望んでるんだし。

そんなことを俺は、夜一人寝る前ベットの上で思った。

朝はぼんやり、目覚ましよりも早く起きた。

だるくて体が何となく重い気がしたから…ん？

「あっ…起こしちゃった？ごめんね」

「え…」

目を開くなり視界に入ってきたのは、俺の体にまたがるなこの姿だった。

俺は何が起きてるのかわからず慌てて飛び起きた。

「うわあああ！！…なっ何してんだよ！？ここ俺の部屋だろ！！」

なこは困った顔をして、俺を見る

「ごめん…彩音ちゃんに頼まれて、久也の部屋のね…ベットの近くのデッキに

イヤホン忘れたからとってきてって…それでとろうとしてたの。」

彩ねえは何故か、俺の留守中にここの部屋で音楽を聴いてるみたいだ。

人の部屋なのに…まったく。

「うまくとれないから、起きないうちにまたがってとっちゃえって思ったんだけど…

起こしちゃったね、ごめん」

なこはそう言って下を向く

つい怒鳴ってしまったが…実はそんなに嫌ではなかったりした

だから少し後悔した。

「もういいよ…早くとっていけよ」

「うん…あとでね？」

パタンとなこが部屋のドアを開けた瞬間…俺はどさっと座り込んだ。

何慌ててんだよ…俺。

その後少し気まずいながらも、なこと彩ねえと朝食をとった。

俺の親は仕事で出張が多いため、ほとんど彩ねえと二人でご飯を取ることが多い。

今は三人だけど…。

そんなこんなで、出かける時間になり

なこと少し何となく距離をおきながら、二人で学校へ登校した。

いつもなら、こちら辺を歩く時渉がいるはずだが…何故かこの日は、後ろを何度か振り向いて歩いたが渉の姿は見かけなかった。

登校中にポケットの携帯を見たら、「今日は先に行くわ」っただけ書いてあった部活なら言うはずだし…なんだろう？

そんな疑問を抱きつつ、俺は教室はいった。

「ん？…」

黒板を見るなり、ホームルームのことが大きく書かれていた。

内容はこのこの学校では、この夏の時期にある林間学校についてだった。

「今年もあるんだっけ…」

俺は高校一年の年、以前付き合っていた宮代姫乃とこの林間学校を

同じ班で回ったことを覚えてる…楽しかったことも切なかったことも。

まあ、今年も渉と同じクラスだし気にする必要はないけど。

何となく思い出して…胸が一瞬締め付けられた…

恋愛なんてしなければ…この痛みも感じずに済んだのに。

「くそっ…」

そんな時

チャイムが鳴り響き、自分の席に着いた。

ドアから、担任と紙の束を持った渉が入ってきた。

そうか…思い出した、確か今日渉は、日直だったけ…

早く行った訳がわかり、ひとり机で納得した。

担任が俺たち生徒を見るなり、話を切り出した。

